

映画『こんばんは2』の世界にふれる

大山町名和地区人権・同和教育推進協議会の研修会が実施されました。内容は、「なぜ学ぶのか、なぜ夜間中学が必要なのか」を問うた映画『こんばんは2』を鑑賞し、講師を中心に意見交換をしました。以下は参加された方の感想です。

「夜間中学」という言葉を聞いたことがありますか。戦後の混乱期に義務教育を受けるべき年代にあつて、貧困や部落差別などさまざまな家庭の事情により昼間学校に通うことができず、形だけの中学卒業者となった人がたくさんいました。そんな人たちの学び直したいという願いを受けて昭和20年代の初め、仕事などが終わったあとの夜間に授業が受けられるよう設置された学校、それが夜間中学です。初期には全国で80校以上設置されましたが、社会情勢の変化や就学援助支援策の充実に伴い減少の傾向をたどり、現在は都市部を中心に33校、約1700人の方々が学ぶ喜びを求めて通学しています。

今では、貧困などにより学びの機会を失った高齢者だけでなく、多様な理由により日本で生活を始

めることになった外国籍の人たちへの学習の機会の提供や、不登校などの理由により十分に学校に通えなかった人たちの学び直しのお場としての役割も期待されています。いくつになっても生まれた場所や育った環境がどうあつても、誰にも基礎的な学びを得る権利があります。日本国憲法では「国民は教育を受けさせる義務がある」と規定されています。それは人権の核であり、国や自治体はその責務においてこれを保障しなければなりません。

9月4日、夜間中学を紹介する映画「こんばんは2」の上映会が人権交流センターでありました。主催は名和地区同推協、講師は鳥取大学地域学部准教授の稲津秀樹さんで、鳥取県内にも夜間中学の設置を求めて運動を繰り広げられています。映画は生徒一人ひとりの声に耳を傾けたドキュメンタリーで、夜間中学に縁を持つことになった理由はそれぞれ違つても、みんなが「教育の機会を剥奪された過去の自分を生き直すことができた」「子どもの時に止まらなかつたものが今動きだした」「字を知らなくても教育を受けてなくても、夜間中学で自身の誇りを取り

戻せた」と明るい未来を見ずえ語っています。なかでもカンボジアから日本に来られた女性は、「学校に行くと以前は見えなかつた未来が見える。未来に希望が持てた」と、現地での悲惨な体験を振り払い語られています。今、彼女たちの「学ぶこと」と「生き延びること」を、我々はどれだけ切実なものとして受け止めることができるか、映画はそう問いかけているように感じました。

今、鳥取県教育委員会は公立夜間中学の設置について、する場合があります。あるいはしない場合の2つのケースを検討しているとの報告がありました。

早速翌日の新聞には「24年度までに開校、夜間中学、県の夜間中学設置検討委員会が方針」と大見出しで県立学校としての設置の記事が載っていました。偶然を驚くと共に、過去には町内でも同和対策の一環として読み書きが不自由なお年寄りのために「識字学級」が開催されていたことや、鉛筆を握る喜び、文字を知る感動、子や孫や友に手紙が書けた感激で満面の笑みを浮かべていたあのみなさんの姿を懐かしく思い出して、これから夜間中学で学ばれるであろう方々との笑顔と重なりました。

大山町人権・同和教育推進大会

日時 11月29日(日)

13時30分～16時

会場 保健福祉センターなわ

演題 「コロナ禍とジェンダー」

講師 上野 千鶴子 氏(社会学者、

東京大学名誉教授、認定NP

O 法人ウイメンズアクション

ネットワーク(WAN) 理事

長)

定員 50名(要申込)

11月12日(木)までにFAX

または電話で人権推進室まで

申し込んでください。

※手話通訳あり

※新型コロナウイルス感染症の状況によつては内容の変更及び、中止になる場合があります。

申込及び問合せ先 福祉介護課人権

推進室(人権交流センター内)

☎0859-54-2286

